

普段着のわたしたち

初売りバーゲンで購入した LED ライト鏡。
購入した理由は「息子が寝ている際、部屋の電気をつけなくてもこれさえあれば化粧ができる！」という母心。



ところがどっこい、目にライトが眩しくて、特に部屋が暗いとその眩しさ更なり。結局、ライトはつけずにただの鏡として使用しています。

私の目論見は儂く散りました。浅はかな買い物だったと悔いております。

500円だから仕方ないか・・・。

訶梨帝母

お寺向けの通販のカタログというものがあります。



はっきり言って買うのにはかなりの勇氣が必要です。まずサイズ感がいまいちわからない。

失敗したら返品も難しそう。

だけど最近の私はサイズ感が簡単になりました。体重が増えたので大きめを買っておけば大丈夫。痩せていた時にはMとLの間ぐらいだったのですが、最近はまだL以上です。 征阿

『友引町内会通信』をスマホでお読みいただくには、<http://www.daigoji-temple.jp/>「友引町内会通信」をクリック。 寺務局

木曾川流域にある私が住んでいる笠松には、冬になると町の八百屋さんには、生きた「寒鮎」が今でも売られています。これを素焼きして、豆味噌、大豆、砂糖を加えて、骨まで食べられるくらいコトコトと煮込みます。昔は冬の貴重なタンパク源でもあり保存食だったのです。白いご飯によく合います。 俊徳丸



季節外れではありますが、ずっと欲しかった明珍本舗の火箸風鈴。とあるネットオークションで割安に手に入れることができました。その音色は、よく鈴虫の鳴き声と評されます。早速屋外に掛けてみたものの現住まいは風が強くて、四六時中鳴り続けるため室内に掛けることにしました。それでもよく鳴るのはなぜだろう・・・。



やっさん

高野山には「般若湯」という美味なる飲み物があると教えてもらいました。1年4ヵ月の間、酒は1滴も口にしませんでしたが、般若の智慧がつくなると、正月に一口含んでみました。しっかりした味。酒造の言い分は、寒い所だからと空海上人も「一杯だけ」はお認めになったとか。お猪口に一杯か洗面器に一杯か、そこいら辺は不明。 迷走ボー



観念　〜諦めることは明らかにすること〜



年齢四十を過ぎ、厄年も終える、と、色々なことに諦めが付くようになる。この様なことを言う、と決ま、って「まだまだ、これから」などと諭されるが、「出来ることと出来ないことの区別がはつきりとしてきたんです」と笑顔を添えて答えるようにしている。

体力は峠を過ぎ、無理をすれば元の調子に戻るまで二日、三日を要するようになった。一日寝れば回復した身体能力の低下を嘆き悲しむこともできるが、おかげで余計な体力を使うこと、使おうとすることが無くなったという利点もある。これは知力、感情においても同様である。

振り返れば、私の青年期は暗いものであった。社会生活に上手く馴染めず、上手く馴染んでいない者を羨み、そのことに思い悩

む日々であった。

私は幸せになりたかった。だから、どうしたら幸せになれるのかを毎日必死で考えていた。その結果、劣等感から他者が楽しんでるものを否定する歪んだ人生を歩むことになった。本当は、あちら側に行きたいのに、である。

何かにつけて否定的な人生を歩んでいる内は、何事も楽しめない。ましてや、幸せになることもない。否定的に送る人生の厄介なところは、他者だけに限らず自分の行動をも否定的に捉えてしまうことである。

このことに気付いたのは、そう遠くない過去である。仲間内で絵を描いたり、和歌を詠む者が現れた。もちろん当時の私はその仲間の否定に走った。しかし、仲間一人と一緒にやろうと説得され、どうしても断り切れず参加することになったのである。

絵を描くことも和歌を作ることでも得手不得手の問題ではない。やり出してみると、それぞれに知的な喜びがあつて楽しいものである。この楽しさを悔しくも認めざるを

得なかつた私は、否定することの勿体なき、否定ばかりしているとどうしてもあちら側、幸せの彼方へ渡ることができないと知った。

誰もが余計な負の感情に流されたくないだろう。良いこともあれば悪いこともあるのが人生だが、毎日を楽しもうと思つたら気持ち良く生きることが先決である。気持ち良く生きるためには、自分で自分の機嫌を取ることを忘れてはならない。

年齢を重ねるといふことは、出来ないことが増えることが増えること。出来ないことが増えること。出来ることが明確になると、一見無意味に思えてしまうこと、これまで無益だと信じて疑わなかつた事柄に意味や利益を見出すことがある。

若い頃は幸せになりたいと必死に藻掻いてきたが、気付けばあの頃はあの頃で幸せだったなあと思う始末である。

私たちは変わる。刻一刻と変わりゆくのだ。

若者にお寺へ来てもらおう

お寺離れの現状を法話の力で改革したい。意欲ある和尚さんたちが全国から奈良県に集まり、昨年10月、法話日本一を決める大会が開催されました。



漫才の「M1 グランプリ」の向こうを張って「H1 グランプリ」とシャレています。チケットは完売。予選を突破して本戦へ出場した人の法話は Youtube で発信されました。

参加資格は、日本仏教会に加盟する宗派、教会、団体に所属する45歳以下の僧侶であること。10分の持ち時間で法話をし、5人の審査員と760人の観客で採点して優勝者を決定するのです。

これは佛教界に起きた正に「革命」です。宗派によって教えが違い、法話の型も違います。一律に採点するのは不可能なはずでした。しかも、観客の中には初めて法話を聴く人もいました。言わば法話の素人の点数の合計が審査員の合計より多いのです。

審査基準はたった一つ、「このお坊さんにまた会いたいと思うか」です。プロの和尚さんが聴き手目線で評価を受ける。つまり、その人が持っているものが世間にどう伝わるかで、「お寺が選ばれる」時代なのです。

説教（法話）は日本の伝統話芸（落語・講談・浪曲）のルーツですから、本来は聴いて面白いのです。その上に、品があって、「良いことを教わった」と思ってもらえるものです。

我が宗では「五段法」という型があります。先ず、お祖師の言葉を述べて、解説をします。例え話で補則して、重点をおくエピソードを紹介した後で、「南無阿弥陀佛」と称えていただけるようにまとめるのです。

これを20分を1つの単位として組み立てます。普通の人が傾聴できる時間がほぼそれぐらいだからです。

セールスマンがこの手法を活用すれば、商品をお客さんにプレゼンテーションし、注文をもらう際に大変効果的です。

お釈迦様は「諸行無常、すべてのものはうつろいゆく。形あるものは必ず壊れる」と説かれました。法話も時流に乗る手法を導入することでよみがえります。お祖師様の教えを伝えるからと言って、今迄のような上から目線の態度や話し方は若者にNGです。

プロテスタントの牧師である私の友人は「宗教は人を縛るものではなく、逆に様々なしがらみから解放するもの、人に生きる喜びを与えるものであるはず」と言います。

コロナ禍で人と人との断絶が進み、誰もが地獄（閉塞感）を感じて、呪縛からの解放を望んでいます。そういう方々に寄り添って、希望を持ってもらえるお話を提供できるか。若い和尚さんたちの力量が試されています。

「偉そうに言うけど、お前は次回のH1グランプリに挑戦するのか」と問われそうです。年齢制限の45歳以下をオーバーしています。いえ、ほんの少しですけど。 **迷走ボー**

ご存知ですか、いぶりがっこが存続の危機にあることを。

「いぶりがっこ」とは、秋田県の漬物。いぶした（燻製）がっこ



（漬物）です。雪深い

東北地方の保存食として農家の人たちが昔から作り続けてきたそうです。大根をナラヤサクラの木の煙で四日間燻し、その後二ヶ月漬け込むと完成で、米の収穫後から作業を始めます。最近では日本全国どこからでも手軽に入手できますし、居酒屋のお品書きにも載っていて、お好きな方も多いのではと思います。ちなみに、私はお品書きに見つけたら必ず注文するくらい好物です。

「いぶりがっこのクリームチーズ乗せ」に至っては、「最初に乗せた人、天才よ」と賛美したいほど。某量販店で「いぶりがっこタルタルソース」という瓶詰めを発見した時は「ここまで来たか」と感動で震えました。

さて、その存続危機の理由です。

昨年夏頃、全国で浅漬け等の食中毒が相次ぎ、国は改正食品衛生法で、漬物を製造するには「営業許可の取得」が必要としました。するとどうなるかといえば、手洗い設備等衛生管理の整った食品加工専用施設を作り、許可を得なければならぬという事。

84 ともりうた

いぶりがっこは農家の人たちが農閑期に自宅の農機具小屋などで作ってきたモノ。
「えー、専用施設作ってまでやらねーだ。銭っかかるしもう年だあ。んだば身内の分だけこさえてヨソへ売らなきゃいいべ。やめるべ」と言ったか言わぬか知りませんが、きつと言っているに違いない。

もう（怒）、どこよ、浅漬けごときで食中毒バンバン出しちゃった業者って。ずさんな管理のせいでいぶりがっこにまで飛び火したじゃない。どうしてくれるのよ。だいたい、浅漬けと保存食に近い製法のいぶりがっこを同じ規制で縛るっていうのもど

うかしら。ウチって秋田の農家に親戚なかったかしら。いぶりがっこがこの世から無くなったら、私ちよつと泣くわよ（自分で燻して漬け込むほどの根性はありませんで）。営業許可を取る期限は2024年の5月。平均年齢七十代、生産農家救済の手はあるやなしや。



実際のところ、それ自体が無くなることはないでしょう。既に全国的に周知されている食品で需要もあるのですから、大手の漬物食品メーカーが管理された施設の中に「いぶりがっこ製造ライン」を作り販売するだけのことです。

でも、そうじゃない。何かが違う。

フリースの上着が軽くて温かくて最強と重宝しつつも、古いが上質なウール地に触れた時の風合いにハツとする、というような、そんな何か。

お寺 De クリスマス



左の写真は、
昨年12月 26
日(日)に私の
お寺にて恒例

の『お寺 De クリスマス』という寺行事をしたものだ。梵鐘のない当寺は「除夜の鐘」をしていないので、年間 17 回ある寺行事の最後を締めくくってお参りとなる。以前、当寺のホームページを管理していただいている K さんが、他所の住職さんから、「君のところは何をふざけていることをやっているのだ！」と気の毒にも一人でお叱りを受けたそうだ。私のお寺は土地柄、昔、織田信長の影響で「隠れキリシタン」が多く存在したため、江戸時代中期にかけて毎年2月にお調べに使用した「踏み絵」と、その際に没収したであろう「マリア観音(3体)」があり、代々住職が密かにお預かりをしてきた。K さんがその事情を丁寧に説明してくださったので年末にこの行事が継続している。この時、本当にやめなくて良かった。

そもそも、「除夜の鐘」以外は、慌ただしい年末に寺行事はしないのが常識かも知れない。これも偶然で、私が住職になってすぐ、毎年11月に行っていた「十夜会」という行事が理由は忘れてができなくなり、日程が押され押されて、全く仕方がなく12月最終日曜にしたことがあった。参詣者は少ないであろうと思っていたら、雪がたくさん積もったにもかかわらず、いつもの 11 月より多い人が訪れた。この意外な結果を私なりに一生懸命考えてみた。日本人はキリスト教徒ではないのにクリスマスをするとは非難されながらし続ける現象。年末

は忙しいと言いながら、本当は、人が集っている温かい場所に肌を寄せたいという心理がシャイな日本人の心の奥底にあるのかも知れない。そう結論に達した。また、作家の竹田恒奏氏の説では、何故、日本人がクリスマスを祝うのか？に対して、元々キリストの誕生日が具体的に記載されたものではなく、夏だったろうとか諸説が乱れ横行し、それを一つに決める際採用されたのが「冬至」の頃。冬至は、太陽が一年間で最もパワーを無くす日であり、更に明日からは夏に向けてパワーをどんどん復活させる日でもあり、キリストの誕生日には最もふさわしいということで12月25日が選ばれたということ。そうすると日本を代表するお日様の神である天照大御神にも当てはまることでもあり、日本人にも共通点があるということ。これはハロウィンと日本の盃蘭盆と先祖帰りで共通点があると似ているのかも知れない。

それはともかく、お寺でマリア様の法要をどうやって行うのか考えたのだが、前例はたぶん無いので苦労した。①この一年間で亡くなった人を偲ぶ ②一年間の懺悔をする ③♪『アベマリアマリア』の弾き語りでマリア様に触れる、この三本柱の構成で数年試みてみたものの何か流れがすっきりしない。それで3年前の当日の朝に、以前迷走坊さんから頂いた『葉っぱのフレディー』の絵本を思い出した。①の部分で読経していたのだが、参詣者の方を向いて朗読を試してみた。3本の柱の流れが一つにまとまりとても良くなった。その半年後、ホームページを見て神父さんが来訪され、「ここで、キリシタン弾圧の殉教者の追悼ミサをさせてください。ここだったら出来そうな気がしました。」最高の褒め言葉だと思った。

俊徳丸

『私説法然伝』(84)

法然がくる⑪

先月号では法然がくるということ、後白河帝の崩御について書きました。今月号はその続きについて書きます。

【俊乗房重源という念佛聖がいた。この時代の傑物の一人とも言うべき僧侶であった。そしてその重源は法然上人とお互いを尊敬する関係性であったことは間違いな

いと、各伝記などから伺い知る事ができる。東大寺の再建計画は治承五年(一一八一年)から始まっている。責任者に藤原行隆ゆきたかが後白河帝により任命されている。法

然上人の伝記によれば藤原行隆より法然上人が東大寺再建のための資金集めの責任者「大勸進職」になるように「オファー」

があったそうだが、法然上人はその任を辞退したと伝えられている。代わりに法然上人は重源その人を推薦したという。藤原行隆は法然上人の師の叡空上人の弟子であったという。さらに法然上人の兄弟弟子でも

あり弟子ともなる法連房信空の父であった。法然上人と関係性があったのは事実だが、大勸進職を法然上人にオファーしたのはフイクシヨンの可能性が高いと言われる。だが、不思議とそれぞれの当事者が縁でつながっているのである。無論、重源もまた不思議な縁で繋がっているのである。

重源は元は紀氏の出自で、真言宗醍醐寺で出家する。その人生はまさに破天荒とも波瀾万丈とも言える。「入唐三度上人」と自称したように、南宋国へ三度渡り、臨

濟宗を立てた栄西禅師らと共に帰国している。南宋では妙智みょうち從じゅう廊ろうという禅僧から寺院の修理や再建のための寄付集めや活動

の技術、つまり「勸進」の技術を学んだのである。帰国後は学んだ勸進の技術で寺院

の復興や修繕活動を始める。その過程で清盛や後白河帝ともつながりを持ち、さらに木材の流通等の事情通ともなる。つまり建

築土木の知識から木材などの資材管理の技術、さらに金銭管理の技術まで幅広い技術を持った当代第一の勸進僧となったのである。さらに重源は南宋でスカウトした様々

な技術者を従えた専門家集団を形成していた模様である。その中に陳和卿ちんわけいという南宋の技術者がいた。彼はその技術を駆使して東大寺の大佛の再建に尽力した。重源が居なければ東大寺の再建はなし得なかったであろうが、それは彼の持つネットワークの広さと、彼が南宋に渡り身につけた技術とスカウトした技術者集団の力によるものである。かの西行法師もまた重源のネットワークにおける協力者の一人であり、頼朝はスポンサーの一人であった。彼らは皆どこかで縁があり繋がりがあったのである】

俊乗房重源という稀代の僧侶は今風に言えば海外帰りのベンチャーIT企業のやり手社長という感もある不思議な方です。その人脈と技術は今の時代こそ必要な能力かもしれません。日本史におけるマルチ人間のナンバーワンでしよう。

以下次号に続く(征阿)

